

# 視線が合いにくい幼児との母子合同発達相談から見えてくるもの —相互作用と内的状態について—

小沢 日美子

A Study of Developmental Consultations for a Mother of a Child  
with Eye-contact Problems,  
concerning their Interactions and Inner States

Himiko OZAWA

視線が合いにくい幼児とその母親との合同面接場面を振り返り、X児が自分—物—他者の関係にかかわる気づきに向かう過程における母親との面接を中心とした家族支援と母子の相互作用を検討した。来室初回時のやりとりにおいてX児は物に働きかけることが多く、他者に働きかけることは少なかった。母親に働きかけた場合も、母親を見ることはほとんどなかった。物を操作している他者に気づきをもつことは見受けられたが、直接に他者の行動を真似ることは余りなかった。他者と相互主体的なやりとりを展開することが困難な幼児にとって、その基盤形成の支援の場への参加に至った母親YさんのX児との関係や内的状態の変化とともに分析、報告する。

## I. 問題と目的

子どもが、社会的認知的発達において他者の視点の存在に気づくようになるのは、自己—物—他者の三項関係の成立を機にしている。最初は、外界のものと自分との二項関係ができ、生後9ヶ月頃から、それを意味づけて働きかける他者がいることに気づき、自分—物—他者の関係が成立するようになる。この頃の指さし行動の出現は、他者が注意を向けた対象物が他者の心的状態を構成する要素となりうる。三項関係は他者とのやりとりの中で発達し、同時に物の存在や機能を知る手がかりになる。指さし行動の出現は乳児の世界の捉え方が質的に変化した徴表になるが、非言語的コミュニケーション機能の発達の中で消失する（内田、2002）。したがって、多くの場合、子どもは身近な養育者（ここでは、以下、「母親」を例として用いる）がその対象物とどのように関わっているかを見て、対象物の意味を知り、自分の周りの世界に意味と名前を与えられる。そこで、他者の動きをまねるという行為は、子どもが自らの身体を通して他者の存在を

受け入れ、自己を確認し、共に生きるという感覚を育てることができる。具体的には、自己と他者との関係性において、身体の働きや作用が互いに把握でき共有できる行為と考えられる。

これまでも、障害児療育の分野では、自己身体を通した心理行為空間の意識化として、模倣が他者認識と自己認識をつなぎ、社会性の発達を促進させる有効な行為であると考えられて来ている。大藪（2003）によれば、子どもが他者と同じ対象に注意を向け合う共同注意（joint attention）には、対面的共同注意、支持的共同注意、意図共有的共同注意、象徴共有的共同注意の4種類が想定され、それらは子どもの発達過程で順次出現し、共同注意の層構造を形成する。他者が対象物を使って行う動作を子どもが模倣しようとするとき、その子どもには共同注意能力が必要とされるが、対象物を操作する他者の行動を模倣する場面は、共同注意が必要な関わり場面である。子どもに意図性の理解が芽生え、意図共有的共同注意能力が獲得されると、その模倣行動は対象物に引き起こされる結果をただ再現するのではなく、例示者の意図を汲み取った模倣行動になる可能性が高くなる。この模倣能力の獲得によって、人間の子どもの文化的産物である道具の効率的な利用が可能になったと考えられている。つまり、子どもの模倣行動と適切な足場（scaffolding）を備えた大人の例示行動は、子どもの文化学習の両輪であり、その基盤には子どもと大人の双方に備わる意図共有的共同注意があるとされる。子は母の視線を追い、母のしている対象を共に見ながら母の発語を聞く。逆に母もこの視線を追い、子のしているモノを共に眺める。このような共同の前言語的行為のなかで得られた形や関係性が言語活動へ展開するために、母子関係、あるいは、身近な養育者との関係性の発達が重要と考えられる。

このような子どもの関係性の発達について、発達上の障害を持つ子どもは、言語、運動、認知、社会性など様々な領域において何らかの発達の遅れをともに有している場合があると考えられている。周囲の人とのコミュニケーション力もその一つであるが、かわり手がその伝達意図や伝達内容、伝達手段などを捉えた、共感し合う活動場面の設定の中に、コミュニケーション行動は発達していく。しかし、三項関係を築きにくい場合、自己周囲の他者やものとの関係の調節が難しく、今ここで起きていることが自分で分からずに常に不安の中にある状態となることにつながりやすい。身近な養育者である他者が、対象物とどのように関わっているかを見て、対象物の意味を知る—三項関係は、コミュニケーションをする上でも、重要な役割を担っている。この役割については、情報処理過程の観点からも、Baron-Cohen（1955）が、「心の理論」メカニズム（ToMM）の形成に先行するものとして共有注意メカニズム（SAM）の形成を位置づける発達段階モデルを提案している。したがって、特に人生早期の発達過程にある幼児にとっ

て、三項関係が構築しにくい時にも、その成立に関わる関係性の発達の援助と、同時に、他者との関係の中に生活して行くための経験の幅を広げていくことは重要な課題と考えられている。

しかし、発達相談に訪れる親にとって、子どもとの将来の関係とともに、いま、目の前の子どもへのかかわりにおける戸惑い、不安、見通しのなさなどは、わが子に抱く不安が漠として形を得ないものとして多岐にわたっている。その理由となる背景の一つには、「自閉性のある子どもの多彩な状態像については体系的な説明がなされていなかった (e.g., 伊藤, 1985)」経緯が上げられる。今日的には、例えばDSM-IV-TR (2003)によると、対人関係・コミュニケーション・適応行動などが、定型発達と相違を生ずる広汎性発達障害 (PDD) の下位項目にある自閉性障害 (Autistic Disorder) は、その対人的相互作用で「目と目で見つめ合う、顔の表情、体の姿勢、身振りなど、対人的相互反応を調節する多彩な非言語的行動の使用の著名な障害」とされている。よく知られている所としても、目を見ない、視線が合いにくいというのは自閉症の大きな特徴の一つにされているが、実際の個々の状態像は全く一様であるとはいえない。発達過程における個人差と、発達様相における多様性との間で、わが子の理解を模索している親や子どもの周囲にいる大人たちは少なくない。また、近年に定められた発達障害者支援法 (平成16年法律第167号) の発達障害の定義によると、発達障害は「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう (法第2条第1項)」とされる。その支援については、発達障害の症状の早期の発見と早期の発達支援、その後の学校教育や就労の支援、発達障害者の自立及び社会参加に資する生活全般の支援及び、福祉の増進に寄与することなどが述べられている。脳機能における障害としての理解が明らかにされることに伴い家族への支援が示されている。一方、個々の具体的な環境の中において、親がストレスを抱え悩み神経を消耗していることは決して少なくない。田中 (2007) は、子どもの問題における発達の相談及び、治療教育のみならず、親自身に対するカウンセリングを、母子を一体とした子どもの治療教育的枠組のもとで実践せざるを得ない状況にしばしば遭遇することを指摘している。元々、親子の営みとは、家庭を基盤とした親子の生活という奥行きが深い、時間的な連続性を伴った人間社会に生きることに在る。発達相談においても、子どもの発達状況の理解と子育ての双方がバランス良く繋がり絡み合う中で、子どもと親が共に生きる支援が求められている。したがって、幼い時期の子どもに対する親の実感を仮に切り離すようにして現実との向かい合いを求めることは、むしろ子どもの目線に立つことを阻み、定型発達を仮説的なモデルとした視点への固執を招いたりしやすいともいえよう。

ここでは、これまでに筆者が発達相談で関わった事例の中から、養育者である親が子どもの発達における特性への理解を進めながら、それを徐々に受け入れて、子ども自身との関係と子どもを取り巻く環境における歩みを進め始めた幼児（X）の母子合同発達相談の過程について取り上げる。そして、ゆっくりと母子で成長していくために、新たな世界に歩み始めた母子とセラピストの関係における相互作用とそれぞれの内的状態とともに経過を報告して、考察を加える。併せて、他者と相互主体的なやりとりを展開することに困難を抱えた幼児に対して、その基盤形成の支援の場への参加に至った母親Yさんの認識の育ちを考察する。

## Ⅱ. 事例の概要

1. **主訴**：「言葉が遅い、落ち着きがない」（母親Yさんより）。
2. **家族**：5人家族。父親（有職者）、母親（主婦）、第一子（小学生児童）、第二子（本児：X、初回時2歳後半）、第三子（乳児）。
3. **生育歴（来室初回時）**：〔出産時〕特に問題なし。〔乳児期：0～1歳〕定頸3ヶ月、座位8ヶ月、始歩1歳2ヶ月、人見知り（一）、後追い11ヶ月〔幼児期：1歳～〕指差し（一）。初語1歳10ヶ月、二語文（一）。〔1:6健診〕単語（一）、喃語等、指示理解（一）。「意味のある言葉はなく、こちらが言っていることも理解できていない様子だった（第三子出産のため相談した機関には通わなかった）」。
4. **子どもの様子（1）母親からの聞き取り（来室初回時）**：〔特徴〕落ち着きがない。話しかけていても違う場所を見ていたりする。〔言葉〕ママ、パパ（呼びかけている感じがいない）。その他、数語。〔生活〕好き嫌いなし。トイレット・トレーニング中。〔行動〕新しい場所であちこち走り回る。音に反応する。階段を上るのが好き。行動は慎重、バランスを崩すことを嫌がる。困ったり転んだりしても我慢して泣かない。〔好きな遊び〕ボール転がし。車を動かす。走り回る。母親と一緒にブランコ乗り。滑り台を上る。本をペラペラとめくる。歌を歌う。〔親との関わりではっきりしていること〕ジュース等欲しい時に手を引っ張って欲求する。〔その他〕お友達の持っている物に関心があり取り上げたりする。
5. **子どもの様子（2）行動観察（来室初回時）**：アイコンタクト（一瞬合視）、言語模倣（単語一語）、覚えている言葉を口ずさむ。絵指示（一）、円錐画模倣（一）、動作模倣（±）、言葉の制止（一）。自己主張（嫌なことにしかめっ面）。遊びでクレール行動あり。多動傾向。
6. **援助方針**：母親からの聞き取りより、胎生期の母体のトラブルや出産時の異常は認められないが、人見知りはなく、1歳6ヶ月健診時の発語や言葉の遅れ、一方的な



コミュニケーションなどが認められる。注意の転導性や多動傾向などからは、置かれた状況の把握がスムーズでない面も現れている。これらからは脳機能中枢系統に関する何らかの問題を持っているのではないかについて疑われた。家族状況は、両親と子ども3人の5人家族だが、両親の実家は遠方で子育ての日常的な援助を受けることは困難だった。母親は、子育てでの精神的・体力的な負担感を訴えており、今後、母子関係とその基盤となる家庭が安定していくように親面接による家族支援も必要と考えられた（来室による継続相談は本セラピストが担当、但し来室初回時は二名で母子対応）。

7. 援助事項：（1）母親の問題意識の明確化をはかるとともに、子どもの専門援助機関等の申し込みにかかわる不安感を支えて行く。（2）機関申し込み手続きでは専門機関と連携を図り、本児と家族らのスムーズな導入を支えていく。（3）本児と家族の援助を長期的な展望の中でとらえ、家庭のもつ養育機能が充実される支援を進めていく。

### Ⅲ. 相談の経過

#### 第1期. 相談の開始：母親と子どもとの向かい合いと母子の絆の確認（#1～#3）

#1（200X+3年Z+5月中旬）〔母親：電話相談〕＝〔母親との話〕「幼児教室に申し込もうか迷っているが、言葉が遅いのが心配」「母らのいうことは分っていると思う」「自分の要求などは行動で伝えようとする事が多い」「2歳半過ぎて心配が強くなった」「きょうだい（小学生と乳児）の世話でこれまでは相談機関に通っていない」。しっかりと話をお聞きしたいこと、お子さんともお会いしたいことを伝えて来室の日程が決まる。＜コメント＞Xちゃんの言葉の遅れの心配だけでなく、「母らのいうこと」が理解されているのかどうか、親らの存在が感じ取れているのかどうか、心配で心が定まらない母の様子が伝えられた。発達上の何らかの障害が疑われたが、母親を支援しながら、今後の方針を共有して行くために来室を助言する。

#2（200X+3年Z+6月初旬）〔母子来室相談：プレイルーム〕＝〔母親との話：乳児（第三子）随伴〕「もしも発達のことになるとこちらでは対応がと幼児教室ではいわれた」「下の子が生まれることになって、言葉が丁度出てくる頃に実家に預けた」「やっと、この子のことが考えられるようになった、けれど長子が帰ってくるとそっちの方に手がかかる」。子どもが通える他機関の情報をいくつか提供しながらどんなことが体験できるとよいか一緒に考える。〔子どもの様子〕走り回り言葉での制止は聞かない。滑り台を上り下り、床を踏み鳴らしながら歩く。覚えた歌を口ずさむ。積み木型クッション積みでセラピストにクレーン行動。好きな絵カード貼りを模倣する。《コメント》現

在までの子育てに関する苦労が語られる。Xちゃんは、新しい場面で動きが多く、母親やセラピストの制止の言葉は入らず、物との関係で要求を行動で表現する。絵カード貼りでは、セラピストの真似をしたり、絵を見て何かを表現しようとする様子が見られた。母親とは、今日のXちゃんの様子を見ながら、今後の環境づくりのための情報提供をするが、他のきょうだいの世話との兼ね合いの問題もあり、もう少し時間をかけて考えて行くことになる。発達の指標となる検査については、ここに慣れるまでは待った方がいい旨を伝える。

#3 (200X+3年Z+6月中旬) [母子来室相談：プレイルーム] = [母親との話：乳児随伴] <最近の様子は>「いつもと同じ」<お父さんは>「お父さんと公園などで楽しそうに」<幼児教室は>「一応保留に」<お母様は>「私もやっと最近Xちゃんと向き合えるようになって」。発達の事からの影響が考えられること、その場合、専門機関に通うことも大切であると伝えると、親子教室に興味を向けたので活動内容を説明する。

[子どもの様子] クレーン行動によりセラピストに働きかけ積木型クッションを積み重ねてどんどん高くしていく。クーゲルバーンに関心を示す。大きなボールを介して母親とセラピストと遊ぶ。<コメント>Xちゃんの支援の背景となる家族の話をきく。今日に至る母親の思いを聴きながら、専門機関への参加で実現できるだろうことについて話をする。今日のXちゃんは、ものを媒介としてセラピストととも関わりが始まる。Xちゃんは、自分よりも大きなボールにぶつかることを楽しみ、この遊びには母親を交えた3人でかかわった。

## 第2期. 相談の継続：新たな視点からの子どもの理解（#4～#5）

#4 (200X+3年Z+7月初旬) [母子来室相談：プレイルーム] = [母親との話：乳児随伴] <この間の様子は>「一緒に協調して何かをするとはいかない、お父さん心配して、Xちゃんの好きな電車に乗せにつれに行ったり」「子どもの集まりでは、滑り台、おもちゃ、他の子とはビデオを一緒に。グループ活動では、クレヨン触ろうとしない。向こうも押して来て叩いて。言葉出ない分、手が出てしまう」<地域のセンターには>「一度行った。広い部屋を走り回ってしまっていて大変だった。ここに通っていることを言った」<家では>「怒らないでもやめているが、初めての所は、あちこちと行ってしまおう」<気持ちが落ち着けて徐々に行動もまとまっていくような場があるといいですね>「親子教室には通いたいが下の子の世話で通えない」。通園バスがある専門機関を取り上げると涙ぐむ様子を見せるが、パンフレットを持ち帰り、相談してみるということだった。[子どもの様子] Xちゃんが持って来た積木型クッションをセラピストが受け取って高く積み上げる。独りでクーゲルバーンの玉ころがしを繰り返す。時折、滑り台を

立ち下りしに行く。ホワイトボード、手渡しした絵カードを貼る。母親は童謡を口ずさみ動物を描く、Xちゃんクレヨンで紙にグルグル。描いた周りにセラピストが飾りをつけてお皿にする。Xちゃんセラピストの膝の上に腰掛けながら、パトカーのハンドルを持って運転の格好。＜コメント＞Xちゃんは、これらの興味のある物を中心に自分から欲求して遊ぶことが多くなる。遊びながらの物の受け渡しで、セラピストはXちゃんと物の関係に介入して行くようになって来る。母親は、Xちゃんには（発達援助の）働きかけが大切だと感じてお絵かきの際にXちゃんに寄り添う気持ちを表現しながら、母親自身の中に浮かぶ動物の絵を描いてみせたようだった。Xちゃんはクレヨンを動かす様子をのぞくが、絵には興味を移さなかった。

#5（200X+3年Z+7月中旬）〔母子来室相談：相談室〕＝〔母親との話〕＜最近は＞「雨で家で。おかあさんといっしょを見て」「お友達がやっている『歯磨き、歯磨きって』（を真似している）」「こっちから話そうとしても話そうとしない。知らないで見ていると、好きな果物や車を本を見て指している、（物の名も）言っていると思うんですが」＜あとは＞「やんちゃな男の子について走り回って、追いかけている」「知らない人でもパッと行ったり、よそのお母さんの膝に座る。みんなと一緒に歌っているとき、好きなことをしたいタイプ。扉を開け閉めしたり」「でも、やらせようという気持ちでやるとダメ。自由に」＜ペースがあるんですね＞「動物好き。近づいていく、上の子は近づかないのに」＜近寄っていくのですね＞。Xちゃんのペースでやっていける場所は無いか話をする。「通うのが毎日ではストレスになるのではないと思う。保育園に入れるのと同じ。まだ親子で。のんびりするのも（いいんじゃないか）」＜お父様は＞「まだもう少し秋になってから考えてもいいんじゃないか、と」。どこかに通った方がいいが、他のきょうだいの世話のことだけで、Xちゃんと離れてしまうことに不安を感じている様子が伺われたとき、「年度途中からでも入れるんですか」という。手続きの過程を伝えると考える様子。そこでXちゃんの状態を確かめるために（状況に乗れば）発達検査を行うことを提案する。〔子どもの様子〕クーゲルバーンをセラピストと一緒に続ける内に場に安定する。母子とセラピストとクレヨンで絵を描き楽しむ。出された円筒を積む。自分でセラピー・ボートに入りすぐ出る。セラピストがXちゃんにカラーボールを投げる。＜チョウダイ＞「（くれない）」＜チョウダイ＞「（くれない）」＜チョウダイ＞を繰り返すと母親の影に隠れる。＜どこかなー＞と覗くように見ると影から少し顔を出して、こちらをチラリと見て、母親の影から出てくる。＜いたー、いたー＞という、セラピストを見ながら体を右横に大きく曲げて頭が床にくっつくくらいになる。「逆さになっちゃうじゃない」。すると寝転んでしまうが、また、立ち上がって（確かめるように）セラピストの顔の頬を両側からつまんでXちゃん自身の顔をぐっ

とセラピストの顔に繰り返して近づける。そして、Xちゃんは寝転がるが再びぐっと近づいて来て髪の毛を持ち、セラピストの懷に入り込むと母親は「あっ」という。このやりとりの繰り返しの3回目、Xちゃんがぐっと顔を寄せると母親は「おどろいちゃうじゃない」。するとXちゃんは寝転び赤ちゃんのようになり、自分でセラピー・ボートに入る。＜コメント＞母親は、Xちゃんが母親の真似をしたり本を指差したりして、そこでの意味のある単語の発生など、Xちゃんと母親自身とで見ているものや、感じているものを大切にしながら、一緒のものに注目して過ごすようになってくる。母親は、Xちゃんが継続的に参加できる専門的な場への参加がXちゃんにとって大切でXちゃんの育ちに意味ある関係づくりに役立つだろうと感じるようになって来る。ただ専門的な場において他者に預けることが、母親自身との関係の発達に支障は生じないのかどうか不安を感じている様子だった。

### 第3期. 相談の展開：母子とセラピストの三者関係における子どもの理解（＃6～＃7）

＃6（200X+3年Z+8月初旬）〔母子来室相談：相談室〕＝〔母親の話：乳児と児童（第一子）を随伴・子どもの様子〕廊下でXちゃん、セラピストを見ると手をつなぐようによってくる。相談室に入るとセラピー・ボートに小さいボールを投げ入れて遊ぶ。（玉がぐるぐる落るおもちゃなどには興味を示さずクレヨンをいじりたがる。母は「ここ半月で、"オイシイネ"というようになる。ここに来るといろいろなオモチャがあって勉強になる」。児童はグラグラを楽しむ。Xちゃんはクーゲルバーンを繰り返し始める。その様子を母親と一緒に見ながら、これまでの遊びをふり返りながら、Xちゃんは枠がある安定した状況でより豊かにしっかりと刺激を吸収しやすいことを伝える。「これからどうすれば」。体験を積んでいくことのできる場の様子を話す。Xちゃん、手に取った際クレヨンを口元にもって行き確かめるようにしてから塗り始めて、ぐるぐると何色かを重ねて気持ちよさそうに用紙3枚に描く。児童はグラグラを楽しむ。乳児がぐずり始めるが、母親はXちゃんの傍らでなぐり描きをしている紙がずれないように押えてXちゃんの描くものを見つめる。母親からの聞き取りより遠城寺式のプロフィールを記入しながら、母親との関係で捉えられるXちゃんの発達の凸凹や発達の遅速さについて伝えていく（参考：基本的習慣≡移動運動＞発語＞手の運動＞対人関係≡言語理解）。＜コメント＞場に愛着を感じ始めて安定し、Xちゃんの方から今まで行った遊びが見られる。母親は、「オイシイネ」の言葉の表出と共に家でXちゃんと食べ物と自分との関係がつながった喜びを語る。母親からこの場に馴染んできたこと、新しい場の選択の問題について戸惑いがあることが伺われた。次回に発達検査実施を予定すると、乳児らを預かってもらうために父親に連絡して直に日程調整をした。Xちゃんと母とを支える父親との

関係の緊密さが力強く伝わって来た。

#7 (200X+3年Z+8月中旬) [母子来室相談：相談室] = Xちゃんは母親と2人で入室。車の提示に注視せず場面から逸れようとする。「気が向かないのかな〜」。お母さんに抱っこしてもらい、できる所を確かめて行くことにする…(略)…検査終了。指示や状況の枠に乗っていくように、お母様にだっこされている時のように落ち着けるように場面構成がされている場での生活経験や、そこでXちゃんとの関係が繋がって展開する働きかけが大切であることを、今ここでの様子を確認しながら話す。〔母親との話〕親子で通えるが、その送り迎えが難しい所には通えない。そこで、涙ぐみつつも「下の子も最近、泣くようになってきて」と初めて母親から乳児の発達についての心配も語られた。第三子が生まれるとき母親が具合悪くなってXちゃんと一緒にいられなかった時のことと共に、今回Xちゃんを毎日通う専門機関に送り出すことでの母子分離の不安が語りながらも、「見学はどうしたら。父親と行きたいので」といい、手続きの話を進める。退出の際、抱っこしている自分の腕の中にいるXちゃんがここにいることを確かめるように眼をやり、自分から離れていってしまわないか、セラピストに尋ねる。Xちゃんがいろいろな人との関係の中で豊かな体験を積むことで、お母様自身との関係もより豊かになることを伝える。「しばらく間が空きますけど、よろしくお願いします」。＜コメント＞教示による課題の枠にきちっと乗ることは難しいが、積み木積み、丸棒・角板入れなどの課題では例示を行うと取り組むことができ動作模倣が認められ、専門機関での小集団への参加では周囲の様子を見ながら行動できるだろうと考えられた。三人の子どもを抱える母親の精神的身体的な負担感の高いものの、ここ最近のXちゃんの様子にみられる感情表現より親子で一緒にいる感じを高めている。

#### 第4期. 他機関との連携：家族と相談機関による新たな子育ての環境づくり（#8～#12）

#8 (200X+3年Z+8月下旬) [母子（及び乳児・児童）来室相談：相談室] = [母親の話（乳児、児童随伴）・子どもの様子] 来室時、Xちゃんセラピストの手を握る。「『ダメー』とか自己主張するようになってきた。のびのび水遊びが好きで」「お父さんが『只今』という『お帰り』という」「よく見ている」「マネしてやってみたくなる。お風呂では石鹸で母親にボディシャンプーをつけようとする、第一子のTシャツをはく」「少し（指でちょっとと表す）先が見えてきたような」「近所で泣いている子に興味を持ってエンエンと泣く真似をする」。児童（第一子）は組み立て式クーゲルバーンを自分のイメージに合わせて作ろうとする。乳児は時折、泣いたりずりばいをしたりする。Xちゃんは母にセラピー・ボートに乘せられるとすわる。Xちゃんは椅子を持って母の後ろを「通して」と2回。母親は見学の日程について来月初旬希望する。「（父親は）



早い方がいいんじゃないか」「祖父母も今は同じ（意見や気持ち）」「こちらからは、言っているんでしょか」と尋ねられたので連絡を入れる予定を伝える。前回の新版K式発達検査の結果を説明する。「そうですね。遅れていますね」とやや深くうなずきながら、結果を聞き入れる。（参考=発達指数の順：姿勢・運動＞全検査＞認知・適応＞言語・社会）。＜コメント＞前々回と同様、きょうだい3人での来室だった。手狭な相談室は、子どもたち3人と大人2人でごった返しになったが、ここに、母親の児童の学校が休みの日々家庭での忙しさが顕わになった。これから始まる新しい環境、そこでの人たちとの今後に不安も高まるものの、Xちゃんのここ最近の変化・成長が母親の心を支えて、（過去の経緯よりも）これからに気持ちが向かっていることが強く感じられた。特に、父親だけでなく、父母の祖父母らも母子を支え今の前進を後押ししていることが母親の様子からも伝わって来た。きょうだい3人での来室のため、Xちゃんと個別にかかわる時間が少なかったが、Xちゃんも自分の居場所づくりに椅子を持ち動いていた。その姿があたかも姿への準備のようだった。

#9（200X+3年Z+9月上旬）〔母親〕電話相談＝〔母親の話〕（事前に通園施設と連携）。母親から見学の申し込みの結果が伝えられる。先方の担当者の親しみやすい話ぶりでほっとしたことが伝えられた。今後の流れを丁寧に説明する。この時機の通園によって期待できること、できないことの課題を整理して伝える。＜コメント＞前に進もうとしているYさんから、新しい場についての良い印象が語られ、その意欲と熱心さが伺われた。また一方では、Xちゃんの親としてこれで良いのかをセラピストと話すことで確かめているようだった。

#10（200X+3年Z+9月中旬）〔母親〕電話相談＝〔母親の話〕見学の報告が入った。電話口の声は明るくはきはきしていた。専門機関がチームで子どもを見る体制である説明を聞いて、わが子を皆で受け入れてくれることに安心した様子が語られた。両親の考えで当日申し込みの意思を伝えたということだった。＜コメント＞父母ともに新しい場に向かって大きく動き出した様子が伝えられた。セラピストは、子どもの変化・成長のために前進するという、この日の決断の重さを支えた。

#11（200X年+3年Z+10月上旬）〔母親〕電話相談＝〔母親の話〕所定の各種手続きが早く進み、セラピストとの予約日前々日が通園開始日となった。無事に行き場所が決まった安堵感、急激な転回への驚きが電話口で語られた。母親に尋ねた所、第三子の発達相談（それに伴った家族支援）を希望したため、今後は、第三子の発達相談の枠組みで伴わせて家族支援を行うことになった。＜コメント＞急遽の通園準備のために沸き立つ思いと戸惑いが語られた。セラピストは電話越しに、両親にとってのその決定の重みを支えた。

## 第5期. 相談活動の再構造化：新たな場での子どもの発見（＃12：〔＃1〕、〔＃2〕、〔＃3〕）

＃12（200X+3年Z+10月中旬）〔母親〕電話相談＝〔母親の話〕初めてXちゃんを送り出す朝は登園支度の忙しさとYさん自身の心の整理をつけることの両方に戸惑った。「（その後の登園時にも）時折抱っこをせがむこともあったので初めはあれこれ考えた」「（だけど）園ではいろいろなことが体験できる。家ではしなかった着替えもするようになった」「2日目には近くの公園にみんなと一緒にいくこともできた」。今までできなかったいろいろなことができるようになったことから現実を受け入れて進んで行こうという思いが語られた。Xちゃんの継続相談は他機関への在籍に伴い終了となった（＃12）。母親の希望により、第三子を対象児とした継続相談を開始した（〔＃1〕※〔 〕内の回数は第三子の相談回数を示す）。行動観察による発達の査定後（〔＃2〕）、経過をフォロー（〔＃3～〕）しながら会っていくことにした。＜コメント＞母子それぞれに環境の変化に馴染むのに「あれこれ」と戸惑い、傷つき、喜び、試行錯誤を重ねた様子が伺われた。Xちゃんも初めは毎日だとは思っていなかった様子も示したが、徐々に、園全体の流れに乗って行くことができたようだった。これまでできなかったことができるようになった体験の話からは、園の配慮や指導及び環境構成によってXちゃんの不安な気持ちが軽減されたことが伺われた。また、朝の身づくりから始まり、決まった時間に決まった場所で言葉かけをされる守られた枠組みの中で周囲の大人や子どもと安心しながら見てまねて行動することで、生活の中でできることが広がってきたことが分かった。また、くつろげる人間関係の中で人に甘えながら行動することを体験しながら、感情表現も豊かになってきたようだった。しばらくは、徐々に日々の園の流れに慣れながら、新しい場における人間関係の中で、人と同じ場を共有し、同じ物を見て、気づき、心を動かしつつ、自己と他者と物の関係性をすり合わせ照合していき、共同注意の体験を育てて行くことを見守ることにした。

## V. 考察

1. 子どもの発達状況と三項関係：親は子どもを育てながら（社会的に）親になって行くといわれるものの、子どもの発達を自己の経験を土台に親が考えるのは極めて日常的な反応である。しかし、セラピストなど発達支援者は、自分自身が訓練を受けたり、訓練された人間と触れる機会が多いせいだろうか、親が子どもの発達の問題の理解や療育等の参加に積極的であることが当たり前であると考え傾向があるかもしれない。中田（2002）は、親が「障害が受容できていない」ということは人間的な一般感情を見落としている点として指摘する。一般に親が自分自身の育ちの経験から、当初は「性格の問題である」「少し発達が遅い」「家ではできる（から本来的問題はないはず）」「機

関に通えば改善する（ものである）」と考えることは、むしろ理解の始まりといえる。Yさんにとって、このような子どもの発達状況との向かい合いは、幼児教室への申し込みが契機となった。来室当初は、セラピストから見ると、子どもと母親との関係は見えにくいものだった。母親も「父母のいうことは分かっていると思う」と語った。そのため、母子ともに情緒的にも状況を整理し、これまでの積み残しとこれからの課題の確認を行う期間を設けることが適切だと考えられた。その経過の中で、来室時の子どもの行動もある程度落ち着いてくるとともに、子どもの遊びに—子どもと物との関係の中に入っていくことで、徐々に子どもとの関係づくりをはかった。当初、新奇な場所では、自分と物との二項関係が目立っていた。そして、母親は言葉を介してのXちゃんのやりとりの発達が遅れていたことから、Xちゃん理解という点でも漠然とした不安を抱え続けていた。そこで、子どもとのかかわりのパターンを相談の中でいくつか提示して行くことによって、相談場面で母親もセラピストの動きをまねるようになったり、家庭などの日常生活の中では母親自ら工夫して一緒に感じたり、何かしらを共有することが徐々に増えて行くようになった。その過程において、日常生活の中で子どもの最近していること、できるようになったことの発見についての各回の面接の報告からは、母親自身が独自に工夫を重ねていたことがしばしば推測されるようになった。5回目では、（セラピストが2名参加した2回目の体験を除いて）初めて子ども（X）と目が合った瞬間がボールのやりとりを介して生まれた。ボールをなんとか、セラピストに向かってくれたこともあった。ただ子どもは、セラピストの顔を見ないでボールを投げることもしなかった。そのために、セラピストが〈チョウダイ〉を繰り返した。しかし、子どもは視線を合わし続けることを体をかかわしたりして逸らそうとしてみたりした。また、反対に、強烈な思いとともにセラピストに突進してきて、ほおを両脇から強くつねったりした。その時も言葉は無かったが、あたかも視線のやりとりで交替する受信者（元）と発信者（元）を確かめているようだった。それは、視線というエネルギーの交流には、少なくともいくつかのエネルギーの流れ方があり、それぞれにチューニングを合わせることが他者とのやりとりで行われることを強く感じさせるものだった。

**2. 子育て支援における家族支援：**対人的相互作用が弱い子どもに顕在化し易い行動には、たとえば、「だめが通じない」「一人でどこかへ行ってしまおう」「呼んでも反応がない」「手のヒラヒラやぐるぐる回り」「身体揺すり」「うろつき歩き」「自傷」「かんしゃく」「奇声」などがある。母親は日々の子育ての中でこれらの行動の対処に困ったり、周囲との関係で神経を消耗したりすることもある。これらの子どもと周囲との摩擦を引き起こしがちな態度には、他者との持ちつ持たれつ関係に入ることの苦手さがあるといわれている。持ちつ持たれつのような感覚から生ずる情緒や欲求が弱いために



自分独りで困難に向き合っていくようになってしまい、周囲から期待される状況を避けたり逃れたりする行動に繋がっていくと考えられている。そして、対人的相互作用の弱さを補い、自分を取り巻く状況や関係の中で、人に頼りながら困難を乗り越えていく態度や行動を獲得することで、状況から逃げる行動が低減・消失しやすいといわれる。Yさんの家族では、祖父母らは遠方だが心理的サポーターとして力強い存在であり、常にXちゃん家族を後ろから支えて後押しをしていたことが強く感じ取れた。父親は来談しなかったがYさんの考えや不安、相談の内容を聞き、常に母親と一緒に考え必要な時には行動を起こす態勢に常にあったことが相談の経過を追う中ではっきりと感じられた。その経過の中で、XちゃんとYさんを支える家族関係においても子どもの発達状況の理解を共有するために、また、今後の方向の検討のために発達検査を母親同席で行った（＃7）。検査は、それまでの相談で、一緒に子どもと遊び、やりとりを重ねる中で子どもの特性を確認しながら積み重ねてきた母親とセラピストとの支援関係において行った。また、発達検査の実施は、来室時の母子の側の準備性と、受け入れ先機関の準備性との兼ね合いを考慮して行った。子どもの発達状態とともに、親の状態、家族（及び身近な支援者）の関係やその人間関係の構造など、それぞれの準備状態を考えて行われるのが、その後のXちゃんとYさん、そして、両親と子どもたちの安定を考慮すると望ましいと考えられたからだった。そして、ここでは、その家族内の状況から、母親より他機関への通園の希望が出された。

**3. 親による子どもの状態像の受け入れ態勢の過程：**養育者である親は面接過程を通して親と子の関係の中に客観的な視点を受け入れることを認めたくない思いを覗かせつつも、一歩ずつ受け入れながら、母子二者の関係で見えるものと異なる視点を新たに取り入れて、子どもとの関係を発達させる視点を築き始めた。上田（1980）は、障害受容の諸段階を「ショックー否認ー混乱（怒り・うらみと悲嘆・抑鬱）ー解決への努力ー受容」の5段階に整理している。このような情緒の動きの過程は、Yさんにおいても、戸惑い、疑問、反発、悲しみ、不安、停滞などの心の動きを通して表されて来た。ただ親自身を支える人々の存在が、この過程における混乱や怒りよりも、親としての責任を担うという意識や行動に自らの思いをまとめ上げていくための大きな力になったと考えられた。

次に、ここでの事例をもとに、相談過程での子どもの状態の受け入れにおける母親の〈内的状態〉の特徴の経過を、子どもと母親と他者（セラピスト）の関係と伴に整理した。第1期「相談の開始」：母子の向かい合いの始まり〈不安・混沌〉。第2期「相談の継続」：新たな視点の導入と関係の動き〈摸索・回避〉。第3期「相談の展開」：母子と物とセラピストの関係の中における三項関係の芽生え〈発見・停滞〉。第4期「他機関

との連携」：子どもの発達像の受け入れの進展と子育て環境づくり〈変化・責任〉。第5期「相談活動の再構造化」：子育て環境の変化と新たな家族相互の支え合いの関係〈母子の成長〉。発達相談で母親が現実吟味と直面化に歩む過程での内的状態では、不安や葛藤などの心の緊張や揺れ動きを抱えながら、子育てのための足場を見つけ、家族相互の支え合いの関係も新たに構造化された。したがって、母親の第1期「相談の開始」から第5期「相談活動の再構造化」に至る過程は、母親の体験過程を通した〈家族〉の発達成長機能の変化過程でもあった。その過程では、環境が子どもの発達に望ましい関係性に再構造化されたといいかえることもできるだろう。それは、また、わが子のことを分かろうとする親の思いにも後押しされていた。

## Ⅵ. まとめ

三項関係を理解する為の機構として共同注意のメカニズム（SAM；Baron Cohen, 1955）は考えることができるものの、その働きの状態の原因は明確にされない所で、情報処理過程における定型発達との相違が上げられている。Baron-Cohen（1995）は、「心の理論」メカニズム（ToMM）の形成に先行するものとして共有注意メカニズム（SAM）の形成を位置づける発達段階モデルを提案している。熊谷（2004）は、SAMとToMMを三項関係という共通の枠組みで捉えた上で、空間・時間・人称関係の側面について両者の構造的差異を分析した。その結果、2つの中間的な段階が存在することが推論され、定型発達児と自閉症児の様々な発達現象と関連づけながら、「心の理論」に至るまでの4つの発達段階のモデルを構築している。そこでは、三項関係の基本型である段階Ⅰ、〈いま・ここ〉の内外や直前・直後の活動表象ができる段階Ⅱ、過去や未来の出来事を展望する中で〈わたし〉や〈あなた〉のより客観的な活動表象ができる段階Ⅲ、仮定事象からの視点を持つことによって〈彼／彼女〉のような3人称の人物の主体的立場を理解できるようになる段階Ⅳを設定している。視線の合いにくさについて考えるとき、今後、Baron-Cohen（1995）のモデル等を参考にしながらも、三項関係の基本型がどのようなメカニズムにおいて「心の理論」に至るのか、相談活動にかかわる様々な現場における具体的な行動に即した関連において考えていくことが一つの重要な視点となってくるだろう。そして、発達相談における親との面接過程は、「親は障害が受容できないかできるか」のような到達点があるものとして位置づける、あるいは単一の軸と構造で捉えるのではなく、家族が相互に支え合える関係づくりを、来談される母親がセラピストとの関係においてエンパワメントしていく過程という基軸によって位置づけることが重要であると考え。そして、子どもを取り巻く家庭内外の状況の準備性のバランスを背景におくことも、目の前の子どもや親を尊重する構え（set）において重要であると考えられた。

**付記** 本研究の一部は、2009年日本人間性心理学会第28回大会の口頭発表にて発表を行った。本稿はさらに新たな知見を加えて加筆修正を行ったものである。本研究の事例ご提供に御協力頂いたYさんに深謝いたします。本研究の分析に御助言いただいた名古屋大学大学院伊藤義美先生、法政大学清水幹夫先生に心よりお礼申し上げます。

### 〈文献〉

- American Psychiatric Association (2000) . *Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR* , American Psychiatric Publishing, Inc (高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (翻訳) (2003) . DSM-IV-TR精神疾患の分類と診断の手引, 医学書院) .
- Baron-Cohen, S. (1995) . *Mindblindness*, Massachusetts Institute of Technology (サイモン, バロン-コーエン, 長野敬・今野義孝・長畑正道 (翻訳) (1997) . 自閉症とマインドブラインドネス, 青土社) .
- 別府 哲・野村香代 (2005). 高機能自閉症児は健常児と異なる「心の理論」をもつのか: 「誤った信念」課題とその言語的理由付けにおける健常児との比較, 発達心理学研究, 16, 257-264.
- 萩原はるみ・小林芳郎 (編) (2005) . 家族のための心理学, 保育出版社, 159-163.
- 古山 勝 (2006) . 重度・重複障害児のコミュニケーション行動形成の指導-三項関係におけるリーチング行動の発達-, 研究成果報告書 (平成15年度~平成17年) -重度・重複障害児における共同注意の障害と発達支援に関する研究, 独立行政法人国立特殊教育総合研究所, 61-71.
- 伊藤義美 (1985). 自閉児マサシの母としての心の軌跡-母親カウンセリングを通してみたSさんの内的世界-, 名古屋大学教養部紀要 B 自然科学・心理学, 29, 43-70.
- 熊谷高幸 (2004) . 「心の理論」成立までの三項関係の発達に関する理論的考察: 自閉症の諸症状と関連して, 発達心理学研究, 15, 1, 77-88.
- 中田洋二郎 (2002) . 子どもの障害をどう受容するか-家族支援と援助者の役割, 大月書店.
- 大藪 泰 (2003) . 共同注意と模倣行動 (「共同注意の発達-社会的認知における意味と役割」) 日本赤ちゃん学会第3回学術集会シンポジウム2 .
- 小野 修 (1993) . 不登校児の親の変化過程仮説-パーソンセンタード・アプローチ, 心理臨床学研究, 10, 17-27.

- 田中 守（2007）．治療教育における母親面接－心に傷を負った母親のカウンセリングを中心に－，治療教育学研究，27，41－48．
- 上田 敏（1980）．障害の受容－その本質と諸段階について－，総合リハビリテーション，8，515－521．
- 内田伸子（2002）．幼児心理学への招待－子どもの世界づくり－，サイエンス社．
- 山崎晃資（1997）．自閉症 発達理解と発達援助 別冊発達22，ミネルヴァ書房，138－150．